

スイートホームは実験室!?

Haruka & Rikuto

藤谷 郁

Iku Fujitani

termity



エタニティ文庫

目次

スイートホームは実験室!?

5

書き下ろし番外編
幸せの予感

341

スイートホームは実験室!?

幼い頃、春花は夢見ていた。

大きくなったら、可愛いお嫁さんになることを。

優しくて、頼りになる男の人と結婚して、ずっとずっと幸せに暮らすことを。

それは、女の子なら誰もが思い描くであろう、薔薇色の未来。

でも、誰でも叶えることができるかというと、それは微妙なところだ。

もうすぐ二十七歳になろうとする今、春花はすっかり受け入れている。

自分が可愛いお嫁さんにはなれそうにないこと。

そして、神様は不公平なのだという現実を――

「もう、本当に失礼しちゃう。僕より背の高い方はちよつと……ですつて。それなら最初に言いなさいよねえ。前もつて釣書を渡してお見合いをセッティングしてるんだから」

三月下旬の日曜日。母親の親友である三杉聡子が、早朝から八尋家を訪れている。

先週、春花は彼女の世話で見合いをした。その結果を春花達に伝えるため、彼女は黒の自宅から日暮里まで、車を飛ばして来たのだ。

「ねえ、春花ちゃん。あんな人は忘れて、次行きましよう、次！」

彼女は恰幅のいい身体を揺すり、本気で怒っている。築三十年の二階建て家屋が倒壊しそうな勢いだ。

「う、うん。そうだね、聡子さん」

春花はとりあえず頷くが、どんな顔をすればいいのか分からない。五回目のお見合い失敗は、さすがに情けなかった。

「今度こそ、絶対にいい人探してくるからね。勤め先でもいろんな人に声かけてあるから」

「勤め先つて、大学の事務所の方に？」

母の静花がコーヒーとトーストを居間に運んで来た。朝陽が差し込む部屋に、いい香りが漂う。

「そうそう、明都大の総務課ね。でも、事務の人ばかりじゃないのよ。この間なんて、研究室に資料を配るついでに、教授達にも頼んじゃった」

聡子は好物のシナモントーストをぺろりと平らげると朗らかに笑った。さっきまでぶんぶんしていたのに、彼女は切り替えが早い。春花はほっとしつつも、今の発言には少し戸惑った。母も慌てたようにカップを置く。

「きよ、教授達って、そんな方々にまで。いくら何でも迷惑でしょうに」
 「大丈夫。いくら私でも、無理やり紹介してなんて言えないもの。それとなく世間話みたいな感じでね、気を遣わせないように頼んどいたわ」

聡子は強引な性格をしてはいるが、気配りの人でもある。春花は母と目を合わせ、胸を撫で下ろした。

「早く決まるといいわよねえ、春花ちゃんの結婚。そうしたら静花も安心して、再婚に踏み切れるじゃない。武志さんも、天国でそう願ってるはずよ」

「う、うん。でも、そんなに焦らなくても」

母は困ったように笑うと、襖を開け放した隣の和室に目を向けた。奥に仏壇が置かれ、右側の鴨居に遺影が飾られている。遺影の父は若く、凛々しい顔立ちをしている。

大らかで優しい人だったと、母や聡子が教えてくれた。子煩悩な父は春花の面倒をよくみて、可愛がっていたと言う。

「武志さんが突然亡くなってから、あんたは女手一つで春花ちゃんを育ててきた。私はその苦労を見てきたからね、遠慮なく次のステージに進んでほしい。ねえ、春花ちゃんもそう思うわよね」

「はい、それはもちろん」

父武志は、春花が小学校に入学する直前、交通事故に遭い亡くなった。それからの母

は、生活のために、朝から晩まで必死に働く日々。

その母が昨年末、仕事先で知り合った男性にプロポーズされた。

しかし、春花を残して一人幸せになるのをためらい、再婚に踏み切れずにいるのだ。春花としては、そんなことはまったく気にしていない。何一つ不自由なく育てられ、大学まで出してもらったのだ。苦勞をかけた母には、遠慮せず再婚してほしいし、幸せになってもらいたいと思っている。それに、春花はもう大人なのだ。母が新しく家庭を持つことにも、自分が一人暮らしすることにも、何の問題もない。

とはいえ、一番いいのは自分も結婚して家庭を持つことだろう。そうすれば母も安心するはず。だから、聡子のすすめのもと、見合いをしているのだが……

「お母さんの親友として、最後の仕上げに協力させてもらうわよ。お見合い頑張ろうね、春花ちゃん！」

子育ての最後の仕上げが結婚なんて、今時レトロな考え方だと思う。けど、母が安心するならそれでいいと、春花は思っている。ただそれが、春花にとってかなりハードルの高い課題であるだけで。

（私をヨメにしたい男性なんて、いるのだろうか）

男の人は、可愛らしい女性が好きなのだ。砂糖菓子のように甘くて、ふんわりとして、守ってあげたくなくなるようなタイプが。

五回の見合い失敗で……いや、もつと前から春花はそのことを思い知っている。こんな容姿に生まれついたのでから、可愛いお嫁さんになるなんて絶対に無理。

(お父さんも背が高くて、骨太だったとか)

モカブラウンに染めた春花の髪はショートレイヤーで、女らしい色気はない。

(身長は一七五とちょっとだから、確かに高いよね。ていうより問題は、この肩幅の広さか。それとも二の腕の逞しさ……)

春花という名前も、似合わなすぎてツライ。春に咲く花のように、愛らしい女性になりますようにと、父が付けてくれたのだけど。

自分そっくりの遺影をちらりと見やり、春花は神様の不公平を恨んだ。

聡子が帰った後、春花はスポーツクラブに出かけた。

クラブは浜松町の会社近くにあり、いつもは退社後に利用している。今日は同期社員おまあいりこの落合理子に誘われたので、珍しく休日に泳ぐことになった。開発部に所属する彼女が、新製品を試着して評価してほしいというのだ。

(せっかくのお休みなのに、理子も仕事熱心だなあ)

春花が勤める株式会社レパードスポーツは、主にスポーツウエアの製品開発・販売を事業としている。入社してすぐ、春花は希望どおり営業部に配属された。契約するスポー

ツシヨップを中心に担当して、五年目になる。

ちなみに、男所帯の営業二課において春花は唯一の女性社員だ。ちよつと体育会系のノリの男性陣に囲まれながら、営業用のパンツスタイルで社用車を乗り回している。

休日の空は、よく晴れて陽射しも暖かい。電車の中でも、行楽に出かける家族連れやカップルを何組も見かけた。

「ホントにいい天気。デート日和びよりって言うのかな」

春花は歩きながら、ビルのガラス窓に映る自分を、何となく眺めた。紺色のトレーニングウェアを着て、肩にはスポーツバッグをかけている。デートとはほど遠い格好だ。

ガラス窓から目を逸らし、歩道を速足で進んだ。

どうしても、もやもやしてしまう。

五回連続で見合い相手に断られた。その心の傷は、春花が思うよりずっと深かったようだ。

日曜日のスポーツクラブは、受付係の女性が平日と違っている。会員証を出すと、彼女は春花の顔をじっと見つめてきて、ぼつと頬を染めた。

「はい、八尋春花さんですね……って。え、女性？」

彼女は会員証の名前と春花の顔を交互に確認し、目を隣またたかせている。

「ごっ、ご利用ありがとうございますっ。頑張ってください！」
「……どうも」

ひっくり返った声を出され、春花まで赤面しそうだった。会員証をバッグに仕舞うと、スニーカーを大股で進めた。

(プールで理子が待つてる。早く行こう)

「ねえねえ。あの人、めっちゃくちゃかっこよくない？」

「やーん、ホントだ。SEVENAREAのカイトそっくりー」

急ぎ足でロビーを抜ける春花を、若い女性が注目してきた。

彼女達が口にしたアイドルグループを、春花も知っている。リーダーのカイトに似ていると、会社の女性社員によく言われるし、自分でもちょっとそう思う。

(うう……スカートを穿いて来ればよかった)

休日のスポーツクラブは、受付係のみならず、利用する会員も平日とは異なっている。更衣室に入っただけにトレーニングウェアを脱ぎ、春花は自分が女であることをアピールした。男性に間違えられて、大騒ぎになっては困る。

「あれま。アンタ女だったのかい。いやー、男前だねえ」

水着に着替え終わると、年配の女性が近づいてきてズバリと言った。心から驚いた様子に、春花は苦笑するしかない。

「おーい、八尋。こっちだよ」

プールに行くと、ストレッチ用スペースで理子が待っていた。スクール水着のような紺のワンピースが、彼女の目印である。

「ごめん、待った？」

「全然」

トコトコ近づいて来た理子は、小柄な身体を背伸びさせて春花を見上げ、ニッと笑う。「実験体になりそうな、ガタイのいい男子を物色してたのよ。いろんな妄想が膨らんで、時が経つのも忘れるわ。ふふふ」

「そ、そう」

よく分からないが、とても楽しそうだ。一体どんな妄想なのか……春花は深く追及せず、泳ぐ前のストレッチを始めた。

理子とは部署は違うが、新入社員研修で同じグループになり、仲良くなった。

有名な理工系大学出身の彼女は理知的で、他の女性社員とは雰囲気が違う。愛想がなくて、口の利き方もぶっきらぼう。最初はとっつきにくい印象だったけれど、話せば面白い人だった。

でも、どこか変人っぽいのは、いわゆるリケジョだからだろうか。

「何か言った？」

「ううん、何でも」

いやいや偏見はよくない。春花は反省し、慌てて首を振った。

「ふーん。ところで、新素材の着心地はどう？」

理子が春花の全身を見回す。

「うん、すごくいい感じ。最初はきつく締まるけど、動くたびにしっくりと馴染んでくる」

「ふふん、そうでしょう。『野性のフォルム』というのが製品コンセプトだからね」

競泳用のハーフスパッツの水着は、学生時代水泳選手だった春花の身体にぴたりとフィットしている。この春、レパードのスィムウエアブランドが売り出したニューモデルだ。開発部に所属する理子は、その研究チームの一員である。

「ブルグレイに白のライン。流線型のデザインは、バンドウイルカをモチーフにしてるんだ」

「へえ、なるほど」

春花はあらためて、着心地のいい水着を見下ろした。このデザインなら海の生き物のように、すいすい泳げそうな気がする。一般のスポーツクラブで着ても違和感のない色使いも、好印象だ。

「それじゃ早速、試してみるね」

「八尋選手の自己ベスト、更新できるかもよ」

「ええ？ まっさかあ」

春花はキャップとゴーグルを装着すると、プールサイドに向かった。

二十五メートルプールは、泳力えいりょくごとにコースが分かれている。初級、中級者向けは平日より混んでいるが、上級者コースで泳ぐのは数人だった。

「ん？」

上級者コースで一人、目立つ人がいた。ストロークが美しい、キックも滑なめらかなクローラだ。水しぶきをほとんど立てずに進んでいく。

「わあ、きれいなフォーム」

春花は呟くと、その人が被る銀色のキャップを目で追いながら、上級者コースへ移動した。

コースは右側通行の左回りで泳ぐルールになっている。上級者で立ち止まる人はおらず、水族館の魚のようにぐるぐる旋回している。

プールに入ると、銀色のキャップが向こうの壁でターンするのが見えた。春花はそのタイミングでスタートする。

（あれっ、何か調子いい。水着の効果かな）

ひとかきで一気に伸びる推進力を感じる。現役時代のような手応えだ。

途中で、銀色のキャップとすれ違う。一瞬だったけれど、フォームが美しいばかりで

はなく、力強い泳ぎであるのが分かった。

（気持ちよさそう。いいなあ、あの泳ぎ）

釣られるように、春花はピッチを上げる。何度もターンするうちに、胸のややもやはいつしか消えていた。水の中にいると、春花は自由になる。広い海原をイメージして、伸び伸びするのだ。

中学・高校と水泳部に所属したのは、この開放感に魅せられたから。肩幅が広くなっただけで、それでも泳ぐことが大好きだ。

コンプレックスもトラウマも、みんな忘れるくらい——

かなりの距離を泳いで、春花はストップした。まだまだいけそうだったけれど、コースが混んできたのだ。肩で息をしながら、泳ぐ人のじゃまにならないよう端に寄り、プールから上がった。

「ああ、楽しかった。この水着、最高！」

スイムウェアの進化に感動し、思わず声を上げる。製品評価を理事に報告するため、プールサイドを急いで歩き出した。と、その時。

「ぐっ……いたたた！」

右足のふくらはぎに激痛が走った。これは、筋けいれん——いわゆるこむらがりえりの症状である。あまりの痛さに動けなくなり、その場に立ちすくんだ。

（うわあ、どうしょ。ちゃんとストレッチしたのに、頑張りすぎたかな）

こんなところに突っ立っただけは、じゃまになる。何とか移動しようとするが、痛すぎて動けない。

「君、無理をしてはだめだ」

低い声が頭の上で響いた。プールのスタッフかと思い、焦って顔を上げる。

銀色のキャップを着けたその人が、ゴーグル越しに春花を見つめていた。上級者コースで、きれいなフォームで泳いでいた人だと、すぐに分かった。

「すっ、すみません。今、どきます。ちょっと足がつってしまっ……」

「そのようだな。ほら、私に掴まりなさい」

彼の口調はとても落ち着いている。戸惑う春花の腕を支えると、彼は一緒にゆっくり歩きプールサイドの端まで連れて行ってくれた。しっかりした支えのおかげで、春花の身体に負担がかからない。それどころかふわりと浮いて、羽根が生えたような気さえする。（わっ）

彼は自分より背が高く、体格もいい。その力強さに、春花はかつてない感動を覚えた。それに、こんなふうに女性として扱われるのは久しぶりで、緊張してしまう。

「あっ、ありがとうございます……ウツ」

自力で立とうとするが、ふくらはぎがピンと突っ張り、涙が出そうなほど痛い。足の

指先が不自然な格好で固まっている。

「ここに座って、脚を前に出す。ゆっくりとでいい」

「えっ?」

彼は床を指差している。

こむらがえりを治してくれると言うのか。春花はとんでもないと手を振った。

「いいんです、そんな。ご迷惑をおかけしては」

「早く処置したほうがいい。放っておくと、痛みが長引くぞ」

それは、確かにそうだ。水泳選手だった春花も、応急処置の大切さはよく知っている。

「お願いします」

「うむ」

彼に支えてもらいながら腰を下ろし、右膝を伸ばした。

「よし。私に任せて、リラククスしなさい」

彼は真向かいにしゃがむと、春花の足首を軽く持ち、固まっている指先を片方の手で包む。そして、きちんと膝が伸びているのを確かめてから、ぐっと押ししてきた。

「……んっ」

「収縮した筋肉を伸ばす。ゆっくりと、慎重に」

ふくらはぎの痛みが徐々に治まっていく。彼の低い声は耳に心地よく、安心感を与え

てくれる。

春花がホッとした顔になると、彼は手を離れた。

「どうだ、少しは楽になったか?」

「はい、かなり楽になりました」

元氣よく返事をする、彼はちよつと笑った。ゴーグルをしたままなので目の表情は見えないが、優しい笑みに感じる。

(あ、よく見るとこの人、度付きゴーグルをしている)

ということ、普段は眼鏡かコンタクトを着けているのだろう。鼻筋が通った顔立ち
は知性的で、眼鏡が似合いそうな気がする。

春花はそんなことを考え、彼が男性であることを急に意識した。

年齢は三十歳くらいだろうか。親切で大人で、落ち着いている。穏やかな雰囲気とい
い、好きなタイプかもしれない。

「立てるか? 気を付けて」

「す、すみません」

立ち上がる時も、彼はさり気なく支えてくれる。春花を守る自然な仕草に、微かにと
きめいてしまった。

「ところで君。さっき、上級者コースで泳いでいたね」

「えっ、はい」

向かい合うと、彼はじつと見つめてきた。ゴーグルの表面には、春花しか映っていない。

「あ、あの……？」

「素晴らしい泳ぎだった。その水着も、よく似合っている」

「え……」

ストレートすぎる言葉に、反応が遅れた。今のは、褒めてくれたのだ。

（私の泳ぎを？ それに、水着が似合うなんて）

「や、そんなことはない……かと」

春花は恥ずかしくてもじもじするが、彼は真剣そのものである。それならば、こちらも真面目に応えなければ失礼だ。

「ありがとうございます。嬉しいです」

「うむ」

彼は深く頷くと、一歩前に踏み出した。急激に距離が縮まり、春花はドキッとす。

（え、何。どうして、こんな近くに）

とある予感が胸をよぎった。

今の褒め言葉には、もっと深い意味がある？ 信じられないけれど、この接近はそうとしか思えない。つまり、彼は男性として私のことを……

「君はまるで……」

「君はまるで……」

ため息のような声で、一体何を言うのか。早鐘を打つ胸を必死で押さえ、期待を封じ込めようとした。私を口説くだなんて、そんなこと絶対にあり得ない。

「かいじゅうのようだ」

「……へ」

怪獣——？

春花はこれまで、平均以上の背丈や体格、中性的な容姿について、男子にからかわれてきた。ノッポだとか、東京タワーだとか、オトコオンナだとか。

だけど、それもせいぜい中学時代まで。彼のような大人の男性がそんなことを口走るなんて信じられない。

「あ、あの、今のって……どういう意……」

「君のような女性がこの世にいたとは。まさに奇跡だ」

「はあ？」

さらに呆然とする。この人は面と向かって、春花のことを愚弄している。しかも真剣

に、冗談のかけらもなく、本気で。

(要するに、泳ぐ姿が怪獣だったってこと?)

そういうえば、グレイの水着は怪獣色と言えなくもない。なるほど、そういうわけだったのか。

春花は拳を握りしめ、衝撃に耐える。だが彼は、不穏な空気にまるで気付いていないようだ。

「実に興味深い。ゼビ、名前を聞かせてくれないか」

(冗談じゃない!)

こんな人にときめきを感じてしまったバカな自分が、心底いやになる。

「私、これで失礼いたします。どうも、ありがとうございます」

こむらがえりを処置してくれたお礼はする。でも、名前を教えるなんてごめんだ。春花は質問を無視して立ち去ろうとした。

「どしたの、八尋。何かあった？」

「ひっ」

蛸たこの頭がにゅっと出た——と思つてよく見たら、赤いシリコンキャップを被った理子だった。

「び、びっくりした。いつからそこにいたの？」

「ついさつきから。この人、誰？」

理子は彼を目で示し、ぶつきらばうに訊いた。見知らぬ男に対し、どこか警戒する目つきである。

「あ、この人は……」

「君は、『やひろ』というのか」

彼は前のめりになって、春花に確認した。理子に呼ばれた名前を聞いたらしい。

「そうです。でも、忘れてください」

くるりと背を向けると、理子の手を引っ張り、出口へまっすぐに進む。「八尋さん!」と彼が呼ぶけれど、絶対に振り向くものか。

怪獣だなんて——

怪獣だなんて!

失礼にもほどがある。

「どうしたのさ。八尋が怒るなんて、めっずらしー」

「……」

理子の指摘に、春花は言葉を詰まらせる。なぜこんなにも腹が立つのか、分かっているのだ。

五回の見合い失敗という大怪我。

傷付いた心にトドメを刺すような、痛烈な出来事だった。

翌日の月曜日。

昨日のダメージが後を引き、朝起きるのも億劫おっくうだったけれど、仕事を休むわけにいかない。それに、忙しくしていたほうが気が紛れる。春花はいつものように出勤し、仕事をこなしした。

「おい、八尋。さっきお前のファンが来てたぞ」

「ファン？」

夕方過ぎに外回りから帰ると、先輩社員が面白そうに声をかけてきた。デスクの上を見ると、カラフルなラッピングバッグが置いてある。

（あ、もしかして）

添えられたカードに、Happy Birthday の文字。今日は春花の誕生日である。

「何課の子か知らんが、二人の女子。『私達、八尋センパイの大ファンなんです』だってさ」

カードを開くと、可愛らしい丸文字が並んでいる。中身は手作りクッキーのようだ。

「あれ、名前が書いてないですね」

「こっそり見てるのが好きだからって、名乗りもしなかったぜ。お礼もいらなそうだ」

「そ、そうなんですか。どうもすみません」

春花は複雑な笑みを浮かべつつ、プレゼントをバッグに仕舞った。

（そっか。私、二十七歳になったんだ）

「お前が入社するまで、俺が人気ナンバーワンだったのになあ」

パソコンで業務報告書を作成する春花に絡んできたのは、六つ年上の神林だ。彼は優秀な営業マンであることに加え、背が高くイケメンで、モテ要素満載の人である。

「なんで俺には、プレゼントくれないんだろ」

「先輩は結婚してるからでしょう」

分かってるくせに、毎度同じことを訊いてくる。悪い人ではないけれど、ちょっとめんどくさい。

「あんな素敵な奥さんがいるのに、贅沢ぜいたくですよ」

「ははは、何言ってるんだよ。素敵だなんてそんな、照れるじゃないか」

神林が年貢ねんぐを納めたのは去年の秋。彼が奥さんに夢中になり、惚れ抜いて一緒にあったとのこと。幸せ絶頂の新婚さんは、ことあるごとにノロケてくる。

そして、お決まりのアドバイス。

「八尋。女つていうのはな、求められてナンボだよ。男に愛されて、大事にされて、守られる。それが究極の幸福ってもんだ」

「……はあ」

神林は意外に古風なのだ。今の時代にそぐわない考え方だが、その熱弁には説得力がある。

「お前を気に入って、どうしても結婚したいってやつが現れたら迷わずヨメにいけ。そうすれば、俺の奥さんのように満たされた生活が送れる」

「自分で言ってるや、世話ないよ。八尋、適当に聞いとけよ」

近くにいた上司がちゃちゃを入れ、周囲で笑いが起きる。神林はさすがに恥ずかしくなったのか、大人しく自分の仕事に戻った。

(まあ、そんな人が現れたら……の話だよ)

報告書を作成し、明日の準備を整えてからオフィスを出た。それほど遅い時間ではないが、既に日が暮れている。

駅へ向かって歩きながら、春花は小さなため息をついた。バッグの中で、見知らぬファンからのプレゼントが、がさごそと音を立てている。

(……二十七歳、か)

苦しい思い出が胸をよぎる。あれから十二年も経つのだ。

中学二年の秋、春花は同級生の男子に告白された。彼はサッカー部に所属するスポーツ少年で、女子に人気があった。どうして自分を好きになったのかと不思議に思いなが

らも、明るく積極的な彼に惹かれ、付き合うようになる。

春花にとって初めての彼氏であり、初めての恋だった。

当時、春花は背がさほど高くなく、平均的な体格をしていた。彼のほうが目線は上で、ごく普通の、バランスの取れたカップルだった。

ところが、中学三年になった途端、急に春花だけが成長し始めたのだ。顔立ちも父親に似て凛々しく、大人びてきた。春花が女子の人気を集め、目立つようになったものもこの頃からだ。

体育祭では、春花が恵まれた体格を生かして大活躍。文化祭の劇では男役をあてがわれ、それが女子に大好評。特に下級生にキラーキラー騒がれ、まさにアイドルだった。

気が付くと、春花の目線は彼より高くなり、そして彼より女子にモテるようになっていた。冬になる頃には、彼との会話は激減し、デートの誘いもなくなった。いつしか彼の目つきは、ライバルを睨むそれになっていた。

そして、卒業を目前に控えたある日の午後、春花は別れを告げられる。

——お前は可愛げがないんだよ。

彼の背後には、新しい彼女がいた。小柄で、可愛くて、甘い甘いケーキのような女の子。その出来事は春花を傷付け、深いトラウマとして胸に残った。

「もう、そんな昔のこと考えたって仕方ないよ」

春花は頭を強く振り、しつこい記憶を追い払う。
 駅に着く頃、ポケットのスマートフォンが鳴動した。発信者を確かめると、母親からである。

「もしもし？」

『あ、ごめんね春花。そろそろ退社する頃かなと思って』

『うん、さつき会社を出たところ。どうしたの？』

『あのね……聡子が今、家に来てるの』

春花はビクツとした。昨日の今日で、一体何の用事があるのか。まさか、また見合い話を？

ずーんと心が重くなる。当分、見合いなんてしたくない。

『大学から直接こっちに来てね、とにかく、すごく鼻息が荒くて……あ、ちよつと待って』

電話を交代する気配がして、直後、勢いのある声が春花の耳を襲う。

『春花ちゃん、私よ、聡子。ちよつと、早く帰ってらっしゃい。とーってもいいお話があるの』

(やっぱり……)

生き生きとした聡子の顔が、目に浮かぶようだ。気が重いけれど、彼女の親切を無下

にするのは、やはりためらいがある。

『そう、なんだ。聡子さん、いつもありがとうね』

『どういたしまして。親友の娘は、私の娘も同然。今度こそ間違いない相手だからね、期待していいわよお。もう、私が結婚したいくらい』

「え……」

聡子がそこまで言うのは初めてだ。それに、いつにも増してテンションが高い。

『とにかく、寄り道しないでまっすぐ帰りなさい。じゃ、待ってるからね』

ほぼ一方的に通話は切れた。

(六回目のお見合いかあ)

しかも、強引に進められそうな予感がある。

スマートフォンをポケットに戻すと、春花は足取りも重く家路をたどった。

「お帰りなさいー！」

玄関ドアを開けるやいなや聡子が飛んできて、春花を廊下に引っ張り上げた。

「ちよ、ちよつと待って。まず、靴を脱ぐから」

「んもう、早く早く」

居間では母が待っていた。聡子とは対照的に、落ち着いてソファに座っている。だがその表情は少し心配そうだ。

「今ね、お母さんには大体のところを伝えただけで、あらためて話すわね」

聡子は母と並んで座り、春花はその向かい側に腰かけた。

襖すきが明け放された隣の部屋から、線香の香りが漂たなってくる。そういえば、今日は父の

月命日だ。仏壇に目を向けると、父の好物だったという羊羹ようじがお供えしてあるのが見えた。

「春花ちゃんのお見合い相手なんだけど、何と立候補者が出たのよ」

「立候補者？」

「昨日も言ったけど、私の勤め先で、いい人がいたら紹介してって頼んでおいたのよ。

事務所の人ばかりじゃなく、教授達にもね」

「もしかして、教授の紹介？」

「ふふん。まあ、そうね」

聡子の勤め先である明都大学は、偏差値の高い、私立の総合大学だ。都内数か所にキャンパスを有している。

春花は少し不安になつてきた。教授の紹介ということは、明都大を卒業し、今は何らかの仕事に就いている社会人——しかも、かなりのエリート男性と思われる。

春花が卒業した大学は平凡なランクであり、明都大とは比べものにならないのだが、いのだらうか。

「その人、私の釣書つがきをちゃんと見たのかな？ あと、写真も」

「もちろん、早速渡しておいたわ。この前みたいなのがあるとアレだから、背丈のことも念を押して。もつとも、彼はあなたより背が高い人だけだね」

聡子は身を乗り出し、自信なさげな春花の肩をぽんぽんと叩く。その人は、すべて納得の上で立候補しているらしい。

「どんな方なのかな」

疑問が湧くけれど、自分より背が高い人というのは安心材料だ。黙り込んでいる母の態度が気になるが、とりあえず聞いてみようと思う。

「実はね、春花ちゃん。その人というのは、私が紹介を頼んだ教授本人なの」

「……はい？」

「明都大学海洋学部海洋生物科学科の准教授じゅんけつ、更科陸人さらなりさん。都内在住・横浜市出身の三十六歳。ご家族は、会社役員のお父様と、専業主婦のお母様が横浜にお住まいよ。兄弟はいません。それから、ええと……職場は明都大芝浦キャンパスだから、春花ちゃんの会社に近いわね。ご自分の研究室をお持ちで、専門は海の生き物」

「そう、なんだ」

何も考えず、口だけで返事した。大学の先生という別世界の人間を持ち出され、頭がうまく働かない。つまり、その准教授が立候補者ということ——

「え……ええっ？」

ようやく意味は掴めたけれど、わけが分からない。どうして、なぜそんな立派な人が、自分の見合い相手なんかに？

「あの……聡子。とてもいいお話だと思っわ。でも、住む世界が違うというか」

春花の戸惑いを、母が代弁してくれた。というより、母自身が思わぬ相手を示され、腰が引けている。八尋家は、高度な芸術世界とは無縁の、凡庸な家庭なのだ。

「それに、春花より十も年上だし、どうなのかしら」

「あのね。よく聞きなさい、あんた達」

聡子は咳払いすると、どんとテーブルを叩いた。

「住む世界だとか年齢だとか、そういう問題じゃないの。更科先生が春花ちゃん本人を気に入って、ぜひ、嫁にほしいと求めている。このお話の素晴らしいところは、そこなのよ」

春花はふと、神林に言われたことを思い出す。

（女ってというのは、求められてナンボ……か）

考えてみれば、これまで紹介された相手は、どちらかと言えば淡々としていた。会うだけ会ってみましようという、事務的な流れで見合いに至った気がする。

春花のほうも、乗り気というほどではなかったから、おたがい様と言えばそれまでだが。「それに、大学の先生と言っても、この方は全然偉ぶったところがないし、いい人だっ

て学内でも評判なのよ。仕事熱心で、真面目で、学生の信望も厚いって、他の教授達も太鼓判を押してた。あとね、年齢は三十六だけど、全然問題ないからね。とつても若々しくて、その上理知的なイケメンだから、女子学生に人気なの。そうそう、特に文系の子にファンが多いって話を聞くわ。だから、私が結婚したいくらいだって言ったでしょ」

「まあ、あなたは昔から面食いだものね」

はしゃぐ聡子に呆れながらも、母はやや安心の面持ちになる。

だけど、当事者である春花はいま一つ腑に落ちない。彼はすべて納得の上で立候補したというが、本当だろうか。

「でも、釣書と写真だけの情報で、どうして私を気に入ったのかな」

顔立ちや背の高さを、特に気に入ったとは思えない。かといって学歴・職歴も平凡だし、趣味や特技も『水泳』のみ。男性の心を捉えるような、女性としての魅力は皆無だ。

「うーん。そのところは、あなたに直接伝えたいと仰ってるの。照れくさいのかしらね」

聡子は首を傾げるが、目つきは春花を冷やかしている。疑問は残るけれど、その男性が春花に好意的だというのは分かった。

「とにかく、一度会ってみなさい。更科先生と直接お話しして、お付き合いますかどうか決めたらいいわ。何度も言うけど、あなたは彼に求められてるんだから」

「う、うん」

神林の声が頭の中で反響している。求められてナンボ――

なぜ求められるのか、理由は謎だけれど、確かめる価値はあるかもしれない。

「それなら、会ってみようかな」

「よく言ってくれたわ、春花ちゃん！」

聡子はソファから飛び上がると、恰幅のいい身体を揺すって喜んだ。

そして、間髪容れずにスマートフォンを取り出す。

「お見合いの日時を決めちゃいましょう」

「ええっ？」

あまりの素早さに、春花も母も呆気にとられる。当人を置き去りに、どんどん話を進めるのは聡子らしいやり方だけど、今回はまた極端だ。

「ま、待ってよ聡子。だってまだ、お相手の写真も釣書もない状態で、そんな」

母が抗議をすると、聡子は画面をタップしながら、首を左右に振った。

「更科先生はお忙しい身なの。ワールドワークでお留守の時も多いし、悠長なことは言ってられない……あ、もしもし。わたくし、総務課の三杉です」

強引に進められそうという予感、大当たり。六回目のお見合いが段取りされようとしている。

「どうしよう、お母さん」

「こうなったら、誰にも止められないわ。聡子だもの」

聡子の親友である母が言うのだから、仕方がない。春花は、満面の笑みでやり取りする様子を見守るほかなかった。

「えっ、そうなんですか。明後日あさってから研究所のほうに……ということとは……はい、あの、少しお待ちくださいね」

聡子は電話を保留にしてキョロキョロし、壁のカレンダーを見つけると指を差した。

「更科先生が、明後日から千葉の研究所に出張なの。戻ってくるのは二週間後だから、できれば明日の夜に会いたいって」

「明日？」

急すぎる展開に、春花は母とともにオロオロするが、聡子は「早く早く」とせかしてくる。

二週間後という、かなり先に感じられる。春花は、自分のことだから、その間ずっと緊張して過ごすだろうと予見した。それなら、いつそすぐに会ったほうが気楽では？

「はい、お願いします」

瞬間的にリスクを計算し、返事をしていく。母が驚いた顔をするが、春花自身もビツクリしている。

聡子は指でOKサインを作ると、相手方と打ち合わせを始める。

互いの都合をすり合わせ、話はまとまった。

明日、三月二十九日の午後七時。銀座の日本料理店にて、二人で会うことになった。平日の夜にお見合い。しかも、二人きりというのは初めてだ。

堅苦しいものにしたくないという、相手の意向を尊重したとのこと。

「ああ、よかった。スムーズに決まったわね」

聡子はスマートフォンを仕舞い、額の汗を拭ぬぐっている。急な展開に戸惑もどろったけれど、一生懸命世話してくれる彼女の気持ちありがたい。春花は素直に、この成り行きを受け入れた。

聡子を見送るため、一緒に外に出る。赤のセダンが、八尋家の門灯もんとうに照らされていた。

「あ、一つ言い忘れてた。あのね、春花ちゃん。更科先生のことだけど」

「うん？」

聡子はちらりとこちらを見向く。

「教授としても研究者としても立派な方なんだけど、ただ、ちょっと……」

語尾がすぼまり、よく聞き取れない。春花は一歩近付き、耳を寄せた。

「ただ、ちょっと？」

「ちょっとね、変わったところがあるらしいの」

「はい？」

聡子にはこりとするが、どこかわざとらしく見える。彼女が車に乗ると、春花は助手

席側から覗き込んだ。聡子が洪々といった感じで窓を開ける。

「あの、聡子さん。変わってるって、どういう……」

「大丈夫、単なる噂よ。ほら、頭のいい人って考えることが違うとか言うじゃない。そう、個人的って意味だと思うわ」

個人的？ それも気になる言い方だ。

「とにかく、会ってみれば分かることよ。それより、春花ちゃん」

春花の質問を脇に押しやると、聡子はきりっとした視線を向けてくる。

「このお見合いは絶対に成功させなさい。こないいいお話、これから先もあるとは限らない。いいえ、二度とありはしないわ。頑張ってください」

「は、はい。でも、さっきのこと……」

「ごめん、気にしないで。先生はちょっと変わってるけど、いい人よ！」

やっぱり変わってるんだ。具体的に訊きこうとするが、聡子はエンジンをかけると、すぐに発進してしまった。

（もしかして……今のって、後出しジャンケンでは？）

昔ながらの住宅街は外灯も寂しく、遠くまで見通せない。テールランプはあつという間に小さくなり、やがて夜に消えてしまう。

走り出した車は、もう止められなかった。

翌日、春花は早めに仕事を終えることができた。会社の最寄駅から銀座までは電車で二駅だから、余裕で間に合う。更衣室でゆっくり着替えて、丁寧に化粧直しをしても時間が余るくらいだ。

姿見の前で全身をチェックする。クラシックな藍色のワンピースは、英国製のブランド服だ。

見合い用にきちんとした服を用意するべき、と聡子にアドバイスされ、最初の見合いをする直前に購入した。

シルエットが美しく、生地も上質で着心地がいい。シックなイメージだけれど、可愛らしさも感じさせる。レースに縁どられたV字襟が、肩幅を狭く見せてくれるのも嬉しい。初めてのブランド服は、お気に入りの一着になった。

だけど春花は、この服を見合い以外で着ることはない。ワンピースは春花にとってお洒落しゃれすぎるアイテムだし、着て行く場所も思いつかないから。

(それにしても、更科陸人さんって……一体、どんな人なんだろ)

コートを羽織りながら、聡子の後出しジャンケンを思い出す。

本日の見合い相手について、『ちょっと変わってる』と彼女は言った。『ちょっと』がどの程度なのか、春花には見当がつかないのだ。

大学の立派な先生。しかも理知的なイケメンで、女子学生の人気を集めているとか。

そんな人がなぜ三十六になるまで独身なのだろう。考えてみれば、妙な話である。

「あれ、めずらしく早いね」

更衣室を出たところで、理子とばったり会った。彼女はまだ仕事中的のようで、製品のサンプルや資料を手に抱えている。

「どっか行くの?」

「あ、うん。ちょっとその……食事に」

「ふーん」

お見合いとは言いつらくて返事を濁すが、理子はそれ以上追及してこなかった。彼女は人のプライベートに関心が薄く、噂話のたぐいもスルーしている。研究に関することなら、グイグイ突っ込んでくるけれど。

(そういうえば、理子も理系の人だよ)

研究者らしく白衣を身に着けた彼女を、あらためて見返す。

今夜会う更科陸人は、理系学部の准教授だ。もしかしたら彼も、理子と同じ典型的な理系タイプかもしれない。そういう意味での『変わってる』なら、春花には許容範囲である。

「ところで、日曜日はサンキューね。高評価をもらって、皆も喜んでるよ」

「ああ、どういたしまして」

試着を頼まれた水着の話だ。着心地のほか、他の客とのデザインバランス等について既にレポートを提出している。

怪獣色の水着——あの日の出来事を思い出すと、春花は複雑な気分になる。しかし、これも仕事の一环。私情を挟まず、水着の着心地等を評価した。

「私なんて現役選手でもないのに、お役に立てたかどうか」

「いやいや、十分参考になりました。それに、スポーツクラブではガタイのいい男子を観察できて楽しかったし。ふふふ……いい実験体が何人も……」

理子は低い声で呟くと、不気味に笑った。

(マ、マッドサイエンティスト?)

普段はいい友人だが、研究のこととなると、やはり近寄りがない。

許容範囲じゃないかも——と、春花は思い直した。

理子がチラリと腕時計に視線をやる。

「ごめん、理子。引き止めちゃって。そろそろ行くわ」

「うん、またね」

変人っぽくても、理子はいい友達。見合い相手の彼だって、案外いい人かもしれない。春花は自分に言い聞かせると、銀座へ向かった。

日本料理店『銀座 桃の里』は、中央通りに面した商業ビルの十階にある。

夜空に伸びる細長い建物を見上げ、春花は小さく深呼吸した。

これまでの見合いは母親や聡子が同伴してくれたが、今日は一人きりだ。銀座という洗練された街の華やかさに、気持ちも吞まれている。

(緊張するなあ。でも、帰るわけにはいかないし)

萎えそうな心を励ましながら、ビルの入り口を潜くぐる。

午後六時四十五分。少し時間が早いですが、店の中にそっと足を踏み入れ、店員に声をかけてみる。

「すみません、七時に予約してあるのですが。えっと……『更科』という名前で」

「更科様ですね。はい、二名様のご予約を承っております。どうぞ、こちらへ」

着物姿の店員はにこやかに笑うと、席へ案内した。

店内は半個室のテーブル席と、個室の座敷席に分かれている。春花が通されたのは個室のほうで、奥まった位置にあった。

「お連れ様がお見えになるまで、しばらくお待ちください」

店員が引き戸を開けると、フロアのざわめきが遮断されて静かになる。春花は息をつき、とりあえずバッグを肩から下ろすと、コートを脱いだ。

部屋はそれほど広くはないが、窓が大きく、開放的な雰囲気なのが好ましい。掘りご

たつ式のテーブルが設えられている。春花は正座が苦手なので、これはありがたかった。それほど気取った店ではなくて、正直ホツとしている。

(あ、そういえば……)

見合いを堅苦しいものにしたくないと、更科陸人が要望したことを思い出す。この店を予約した彼に対し、春花は好感を持った。

(それに、もしかしたら銀座を選んだのは、私の職場に近いようにと気を遣ってくれたのでは?)

大学の立派な先生で、ちよつと変わり者。だけど、本当にいい人なのかもしれない。

ポジティブ思考になったところで、引き戸の向こうから声がかかった。

「失礼いたします。お連れ様がお見えてございます」

「はっ……はい!」

コートを手ハンガーにかけると、慌ててテーブルの前に正座した。

いよいよ六回目の見合いが始まる。引き戸が開くのを、固唾を呑んで見守った。

「こんばんは、お待たせいたしました」

低い声が聞こえて、春花は再び緊張を覚えた。

店員が引き戸を全開にして脇に退くと、その人は部屋に入って来る。春花は頭を下げた。「こんばんは。いえ、私も今着いたばかりですので」

「そうか。それはよかった」

(ん……?)

親しげな口調に、春花は続けようとした言葉を止める。この喋り方、最近、どこかで聞いたような? そう思い、ゆつくりと顔を上げる。

濃紺のスーツを着た、背の高い紳士。豊かな黒髪を七三に分け、ふわりと流している。さりつとした眉、美しい鼻梁、フルリムフレームの銀縁眼鏡に、奥二重のクールな眼差しが覗く。

こんなイケメン、見たことない。

思わず見惚れる春花の前に、彼は正座した。

「後ほど、お飲物のご注文を伺いにまいります」

店員が下がり、引き戸を閉める音がすると、彼は赤い幾何学模様のネクタイを軽く直した。春花は居住まいを直し、あらためて正面から向き合う。

いや、やっぱりどこかで見たことがある。確信はないけれど、本能がざわつくようなこの感覚。

「あの……更科陸人さん、ですよね?」

思わず口から零れたのは、本物かどうか疑うような、不躚な質問だった。

しかし、彼は特に気にするふうでもなく、普通に受けて答える。

「そのとおり。そして君は、八尋春花さんだ」

間違はなく、本日の見合い相手のようだ。聡子から聞いた、更科陸人の特徴とも重なる。春花より背が高く、一八五センチはあるだろう。年齢は三十六だそうだが、もつと若く感じられる。端正な顔立ちは理知的で、見れば見るほどイケメンである。女子学生に人気があるのも頷けた。

「だけど、この違和感は何なのか。どうしても、初めて会った気がしないのだ。」

「ふむ……」

更科は人差し指で眼鏡の位置を正すと、考える顔になった。春花について深く思考するかのようになり、じっと見つめてくる。

「やはり、この姿では分からないかな」

「え？」

今度は春花が、彼をじっと見つめた。

「八尋さん」

「は、はいっ」

「先日は、失礼いたしました」

「……」

やはり、どこかで出会っている。でも、どこで？ 大学の先生と知り合う機会などない。

（それに、この姿では分からない……って、どういうこと）

思い出せそうで、思い出せない。春花はもどかしかったが、彼は落ち着いた様子で話を続けた。

「ふくらはぎの具合はどうだ。痛みが長引かなければいいと、心配していた」

「ふくら……はぎ？」

その言葉が呼び水となり、一気に記憶が蘇^{よみがえ}る。

もう一度、穴が開くほど更科陸人を見つめた。黒髪を銀のキャップに、眼鏡をゴングルに変えてイメーヅする。そこに出現したのは、スポーツクラブで出会った彼――

春花を怪物呼ばわりした、無礼な男が目の前にいた。

「まさかそんな。あなたが、あの男って。え……ええーっ？」

五回の見合い失敗で落ち込む春花にトドメを刺した、あの出来事。それを春花は忘れていない。その彼が、どうして、なぜ、この場にいるのか。それも、六回目の見合い相手として！

「ちよつと、すみません。これは何か、悪い冗談でしょうか。そうですよね？ だって、あなたが私と見合いするなんて、あり得ないですし」

「ほう、なぜだ」

更科は心底不思議そうにする。なぜだなんて、よくもしらじらしく言えたものだ。

「なぜ、そう思う。私は君をとでも気に入って、三杉さんに紹介してもらったんだ。彼女から聞いているはずだが？」

「そうだ、そのところがおかしいから、あり得ないと言うのだ。」

彼は片膝を立てて身体を起こし、迫ってくる。春花は後ろに手をつき、仰け反る体勢になった。

眼鏡の奥で光る、鋭い目が怖い。

「どっ、どうして私を気に入ったのか、それは聞いていません。あなたが、直接私に話すと言ったんですよね」

「ふむ、そうだ。君が何か誤解しているようだから、スポーツクラブでの件はあえて明かさず、紹介を頼んだ。まず会ってもらわなくては、どうしようもないからな。とにかく見合いに持ち込み、直接話すことにしたのだ」

——君は、『やひろ』というのか。

彼が呼び止めるのを、春花は無視した。はつきりと怒った態度だったから、彼は策を講じたというのか。

「『やひろ』という苗字に、おや？　と思った。三杉さんが『いい人がいたら紹介して』と写真を見せてくれた女性が、確か『八尋春花』といった。水着姿でキャップを被っていたからピンとこなかったが……君をよく見て、その写真の女性だと確信したのだ」

「そうだったんですか。でも、あなたが私を気に入ったなんて、信じられません」

「私も、なぜ君が怒ったのか見当もつかない。だから、会話をすべきだろ？」

間近に迫る、大きな男の人。春花よりも肩幅が広く、頼れる身体つき。眼鏡の似合う理知的な顔は、想像したとおりだ。

春花は困惑した。あんなにひどいことを言われたのに、最初に感じたときめきが復活して、そわそわしている。君は誤解していると彼は言うが、その理由を訊きたくなってしまう。

「失礼いたします」

引き戸の向こうから店員の声が出た。飲み物の注文を取りにきたのだ。

仰け反った体勢の春花は慌てるが、更科に肩を支えられ、まっすぐに座り直した。力強いけれど、決して乱暴ではない。そっと守るような、男らしい触れ方だった。

「すまない、つい前のめりになってしまった。大丈夫か？」

「は、はい」

心配そうに覗き込む、きれいな瞳。彼はプールでも、春花を女性として扱ってくれた。あの時の感動を、身体が覚えている。

「仕事帰りで、腹が減ってるだろう。まずは、食事を始めよう」

更科の合図で店員が入室し、注文を取るため脇に控える。

事態がよく呑み込めず、気持ちの整理もつかないけれど、とにかく春花は席に着いた。

「酒はいけるほうか？」

「あまり強くありませんが、それなりに飲めます」

「そうか。では、少し付き合ってもらおうかな」

更科はちよつと笑った。

「あっ」

「何だ？」

「いえ……何でもありません」
彼の表情は基本的にクールで、鋭い目つきは怖いくらいだ。そんなところは、いかにも理系の人という印象を抱かせる。だけど、今の微笑みは異なるイメージだった。

（そうか、この人は笑うと目が優しくなるんだ）

初めて会った時は、ゴーグルに隠れてその目がよく見えなかった。小さな発見だけど、春花は意外なほど楽になることができた。

聡子が言うように、彼は悪い人ではないのかもしれない。

（話を、してみよう。そうすればきっと、いろんなことがクリアになる）

注文後、飲み物と食事が運ばれてきた。店員が出て行くと、更科は春花とまっすぐに向き合い、酒の入ったグラスを掲げる。

「それでは、乾杯といこうか」

「はい」

吟醸酒の爽やかな香りと甘さ。柔らかな口当たりには、春花は目を細める。この酒は更科が選んだものだが、春花の好みにびたりと合致する。

「美味しいです！」

「それはよかった」

領くと、眼鏡の位置を指で直す。その仕草は彼の癖のようだ。

「せっかく料理が来たのだから、話は後にしよう」

話は気になるけれど、料理が冷めてはいけない。春花も同意し、二人は食事を始めた。前菜に汁物。海老や鯛のお造り。金目鯛と根菜の煮物。太刀魚の手綱焼きなど……

テーブルに並ぶのは、旬の魚介類を中心とする日本料理で、酒と同じく春花の口に合う。更科を見れば、彼も美味しそうに食べている。食べ物の好みが一緒なのかな、と春花は思った。

「さて、私についてだが……」

コースが一段落したところで、更科が自己紹介を始めた。

彼のプロフィールは聡子から聞いたとおり。明都大学海洋学部（せいん）の准教授で、自分の研究室を持ち、学生とともに海洋生物の研究をしているとのこと。

「海洋生物というのは、海の生き物ですよね？」

「そうだ」

なぜか彼は、にやりとした。さっきのような優しい微笑みではなく、どこことなく理子を思い出させる、危ない笑みに見えた。

「ふふふ。私は『彼ら』に魅せられている。それゆえに、君を気に入ったのだ」

「はあ……えっ？」

いきなり本題に入ったことに、春花は戸惑う。海洋生物の話が、なぜそちらに転がるのか？

「あの、どういうことでしょうか」

「ん？ 忘れたのか」

「はい？」

「……」

忘れたって、何を？

「この前、プールで君に言ったことだ」

更科は呆れているが、さっぱり分からない。海の生き物に関する事など、話した覚えがない。

というより、彼との会話で思い出すことと言えは――

立ち読みサンプル はここまで

「まあいい。とにかく、こうして君と再会して、私はあらためて感じている」

更科は目を細めると、熱い視線を向けてきた。不気味な笑いを収め、大真面目な態度になる。その姿に、あの言葉を発した時の彼が重なる。

まさか……

「君は実に、かいじゅうに似ている」

やっぱりだ！ いやな予感的中した。

「さっ、更科さん。あなたは、私が怒った理由をまるで理解していないのですね。それとも、からかっているんですか？ ひどいですよ、怪獣だなんて！」

唇を震わせ、必死の思いで抗議した。一度ならず二度までも、侮辱するなんて許せない。

「むっ、なぜだ。君はかいじゅうが嫌いか？」

「な……」

悪びれもせず問いかける更科の顔を、キッと睨みつけた。

「好きとか嫌いとか、そういう問題じゃありません。ビジュアルですよ。私が怪獣に似ているというのは、つまり……」

ん？ かいじゅう――？

海洋生物というのは、海の生き物。更科が研究している『彼ら』というのは……

「もしかして、海獣のことでしょうか？ 海の獣と書いて、かいじゅうと読む……み